



人は違うからこそ面白い
その妙味を一人芝居によって表現

イッセー尾形氏

俳優

Issey Ogata_1952年福岡県生まれ。71年演出家の森田雄三氏と出会い、演劇活動開始。80年に現在の一人芝居の原型となる「バーテンによる12の素描」を上演、翌年テレビ「お笑いスター誕生!!」で金賞を獲得。以降、「都市生活カタログ」シリーズで脚光を浴びる。93年から海外公演をスタート。また一人芝居のほかにも桃井かおり氏や小松政夫氏との二人芝居、映画、ドラマ、CM、司会、小説の執筆、絵画など幅広く活動している。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、湊美和

Text = 湊美和 (56~58P)

大久保幸夫 (59P)

Photo = 刑部友康

撮影協力: カフェ マメヒコ渋谷店

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

失業中の会社員、パートン、家政婦など、さまざまな職業の人物を一人芝居によって表現し続けるイッセー尾形氏。それぞれの人が持つちょっとした個性の差を、より際立たせて濃厚に印象づけるその芝居は、国内外で高い評価を受けている。道具に頼ることなく体だけを使って職業を演じるその「型」は、30年間変わることなく続けられている。

イッセー尾形氏 キャリアヒストリー

1952年	0歳	福岡県生まれ。父は保険会社の社員で転勤を繰り返し、小学校3年で東京に引っ越す
1971年	19歳	美術の教員を目指し、大学を受験したが失敗。ビル清掃のアルバイトの傍ら、演劇学校に入学する。そのとき、事務手続きを担当していたのが、後のパートナーとなる演出家の森田雄三氏
1973年	21歳	演劇学校卒業後、「自由劇場」にて森田氏の初演出の舞台に出演。だが数年後に、劇団は解散する
1976年	24歳	生活のためにビルの建設現場で働く。そこで森田氏と再会し、2人で演劇活動を始める
1980年	28歳	現在の一人芝居の原型となる「パートンによる12の素描」を上演
1981年	29歳	「お笑いスター誕生!!」に出演。さまざまな職業の人物を演じ、8週勝ち抜き金賞を獲得
1982年	30歳	一人芝居「都市生活カタログ」シリーズがスタート
1992年	40歳	地方公演を開始
1993年	41歳	ニューヨークで初の海外公演。この後、海外での活動も盛んになる
2005年	53歳	一般の参加者とワークショップで芝居を作り、「イッセー尾形とフツのん人々」として発表
2006年～		ワークショップと一人芝居公演で全国各地を回る



1994年ミュンヘンでの公演。パフォーマンスが評価され、南ドイツマスコミ団体から優秀賞が贈られる



近年は、力強い経験を
する人間を描写する。
写真の演目は「むむむ
ひバドミントン」

人間の面白さを、職業を使って表現 一人芝居の独自のスタイルを確立する

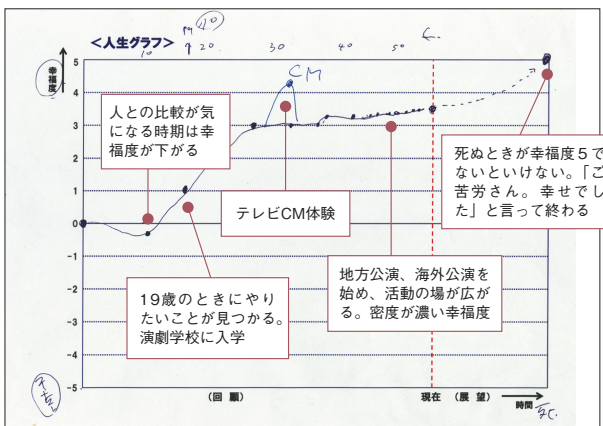
尾形氏が一人芝居を始めてから、間もなく30年が経とうとしている。これまでに演じた人物は600を超えた。だが、19歳になるまで、役者を職業として考えたことは一度もなかったという。

「体を使って表現したいというのは、自分の中のどこかにあったんだと思います。そのチャンスをずっと待っていた。ビル掃除のバイトでパントマイムをやっている女性と一緒に仕事をすることがあって、そのとき、演じるって方法があると知ったんです。まさに、これだという感じでしたね」

演劇学校に入学し、後のパートナーとなる演出家の森田雄三氏と出会う。だが、ともに参加した劇団が解散。しばらく音信不通の状態であったが、偶然の再会によって意気投合し、2人での芝居作りが始まる。演出家1人、役者1人で何ができるか。模索する日々のなかで現在の一人芝居の原型が生まれた。

「あの頃は人物の作り方が雑だったと思います。なにしろ自分自身の人生でさえ、役者で食べていく覚悟なしに、『なんとかなる』程度に大雑把にとらえていましたから。ほかの人の人生や気持ちを理解し、細やかに表現するなんてできるはずがない。だから、一番はじめにやったネタはパートンだったんですが、これは、気持ちとか中身うんぬんには無頓着。外見をしっかりと作ることからスタートしたんです」

パートンらしい容貌で、オールバックに蝶ネクタイ、怪しげな眼鏡。窮屈なカウンターの中に閉じこめられている。外見からわかる情報だけ、しっかり作りこんだ。すると、他の部分は、観客がそれぞれに想像し、反応してくれた。観客がその職業を知っていれば、面白いネタになるのだ。



直筆の人生グラフ。芝居を始めてから幸福度の基準は観客の反応。地方公演、海外公演によって表現の場が広がり観客の反応も大きくなると幸福度は上昇。

「たまたまバーテンというネタをやったために、職業を演じるという目標が見つかったんですね。それからは、職業別の電話帳を持ってきて、こんな職業もあるのかよって。ネタ探しですよ」

詳しく知らない職業でも、知らないからこそ想像できる。知らないからこそ演じる自由がある。また、この頃はネタにする職業に携わる人をスケッチしていた。絵画は、美術の教師を目指したほどの腕前である。人の特徴をとらえるのは、尾形氏の得意とするところだった。

さらに、尾形氏は自身の体だけで職業を表現することにした。その職業に従事する人物を想像して、それをデフォルメして、動きや表情、口調を変えていくのだ。最低限の小道具だけを留意し、余分なものはできるだけ排除することで、多くを観客の想像にまかせる。さまざまな職業の人物を身ひとつで演じるというシンプルな芝居の「型」は、東京と沖縄の2カ所の小劇場を拠点にして続けられ、現在の一人芝居の基礎となっていく。

言葉や文化を超えて 説明せずとも伝わる演技

「30歳のはじめに、テレビCMに出たことは大きな衝撃でしたね。『イッセーさん、今の芝居すごくいいね。でも0.5秒長い』って言われたんです」

テレビCMの時間は15秒か30秒。その短い間に、起承転結の筋を演じることは難しいだろう。その「0.5秒の演技」とは何を求められたのか。

「要は、説明しない演技をしるってことです。CMはあんな短い時間で、詳しい説明をしなくてもしっかり伝える。悔しかったですね」

この経験が、日常のひとコマを演じるという尾形氏の芝居をさらに切れのよいものに変えた。

40歳から地方公演、海外公演と活動の場を急速に広げる機会を得る。この頃から観客の様子に目がいくようになっていく。

「地方の大きな劇場で、まだ僕をまったく知らない人に向けて芝居をする。怖いですよ。でも、反応もクスクスとかフフツとかいった笑いじゃなくて、大量に押し返してくるんですよ。そうすると、その大きさに匹敵するような喜びが湧いてくる。また、海外に行けば、日本人であることを強烈に意識させられる。言葉も文化もまった

く違いますからね。だけど、その違いを超えて、通訳を介するから間接的にはなるんだけど、反応があったり、届いている実感があると幸せが増すんです」

そして体中興奮して日本に帰ってくると、今度は言葉が直接伝わる恐ろしさを感じるのだという。

人間が面白いから、人間を演じる テーマは尽きず、一人芝居は続いていく

こうした経験を繰り返すなかで、最近では、観客が舞台に何を見出しているか気になり始めた。

「それを考えていたら、僕が舞台の上で何をやるのかがはっきりしたのね。それは具体的な経験を演じること。観客は、自分の今までの経験や知識を通して、僕の演じる経験を観る。観ることで経験をするんですよ。であれば、今までのように誰しも経験できることを舞台に上げるのではなくて、主人公に舞台の上で、力強い経験をさせてみたいですね。ビルとビルの中の狭い隙間に入っちゃったとか。ラーメン屋でラーメン食べようとしたらゴミが入っていたとか、困った状態。それがここ7、8年くらいの“作業”です」

ネタとなる人間のとらえ方、見え方を変化させながら一人芝居というスタイルを変わず続けてきた尾形氏。今後も市井しげの人を演じていくという。

「人を笑わせるのが好きなんです。笑うって生きていることの原始的な証だと思う。人間が一番面白いから、人間を演じて人を大爆笑させたい。人間という生き物が終わりを迎えない限り、一人芝居はずっと続けますよ」



■ イッセー尾形氏のキャリアをこう見る

「職業を踊る」 生涯を賭した芝居人生

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

はじめてイッセー尾形氏の一人芝居を観たのは、私がまだ大学生のころ、渋谷のジャンジャンという小さな小屋だった。薄暗い灯りの下で、彼は、舞台セットも共演者もいないなかでバーテンダーの姿を演じていた。どこにでもいそうで、現実にはいないバーテンダー。その芝居を観たときに「面白い型だな」と思った。それから何度となく氏の一人芝居を観てきたが、その型は現在もなお基本的には変化していないように感じる。

それを氏に尋ねると「確かに当時から型は変わっていませんね。『職業』と『身体』という土台がはじめからありました」と答えてくれた。

フランスの社会学者であるマルセル・モース (Marcel Mauss) は、習慣とは異なる、人間の示す身体運動を「ハビトス」という言葉で概念化した。日本語にあてはめれば「型」ということになるだろう。氏の一人芝居は、職業人のその職業らしい身体運動(つまりハビトス=型)をスケッチして、借り受け、デフォルメして、身体を使って表現しているのだ。その一連の作業が一人芝居としての「型」にもなっているのである。

すでに演じた職業は600種を超えるという。「職業カタログ」という彼の言葉の通り、あらゆる職業の型が想像によってデフォルメされて舞台上で再現されてゆく。

彼の芝居は、観る人の経験に問いかける。今まで職業にどのようなイメージを持ってきたか、

どのような人物を見てきたか。観る客に経験が豊富にある職業ほど面白い。それは芝居が、客の目、解釈を得て完成されるようになっているからなのだろう。

尾形氏は「私の人生は、決断というよりは持続によって成り立っている」「死ぬときが人生の幸せのピークであることは決まっている」という。

これからも一人芝居の探究は生涯を賭けて続いていくに違いない。ただし、もっと踊るように、もっと観る客に解釈を委ねるようになっていくのではないか。インタビューをしていてそんな印象を持った。

イッセー尾形氏の一人芝居 (私の解釈)

職業を通じて社会的に形成される
身体運動 (ハビトス=型)

イメージーション、スケッチ、
デフォルメして

一種の踊りのように身体全体で表現して
(身体)

観客の経験や解釈を加えて完成させる

という「型」を持った一人芝居